えくてびあん

3

立川と語ろう　立川に生きよう
March 2006
écoutez bien Vol.24 No.256

表紙の人／三島 徹(柴崎町)　写真／細江英公

MURAGOYOMI
われらの村暦
国営昭和記念公園
「こもれびの里」の1年 ⑧

写真：五来孝平

春耕

麦の丈が伸び、ひと雨ごとに土も暖かくなる春。こもれびの里も忙しくなる。
水田では苗代づくり、畑ではジャガ芋の植付け……。
すべての命が次第に勢いを増しながら動き始める。

秋に落ち葉を集めた堆肥場を崩し、よく熟した腐葉土を畑に入れ、春作が始まる。ひと鍬ごとに、冬の間乾いて眠っていた畑の土がほっくりと生き返る。

まずはジャガ芋の作付け。種芋を二つに切り、切り口の消毒に灰をまぶす。それを耕した畝に等間隔に植えていく。作業をしていると、じっとりと汗ばんでくる。このジャガ芋が、麦に続いて収穫できる夏の稔りになる。

水田班は田起こしと苗代の準備。堅くしまった土を鍬で起こし、苗代には本格的な代掻きより一足早く水を引き込んで平らにならす。半年間水を抜いていたとはいえ田んぼの土は重く、見た目以上の重労働だ。

里の梅の花は満開。知らぬ間に草木の芽が伸び、鳥たちのさえずりも賑やに聴こえてくる。本格的な春がすぐそこまで来ている。

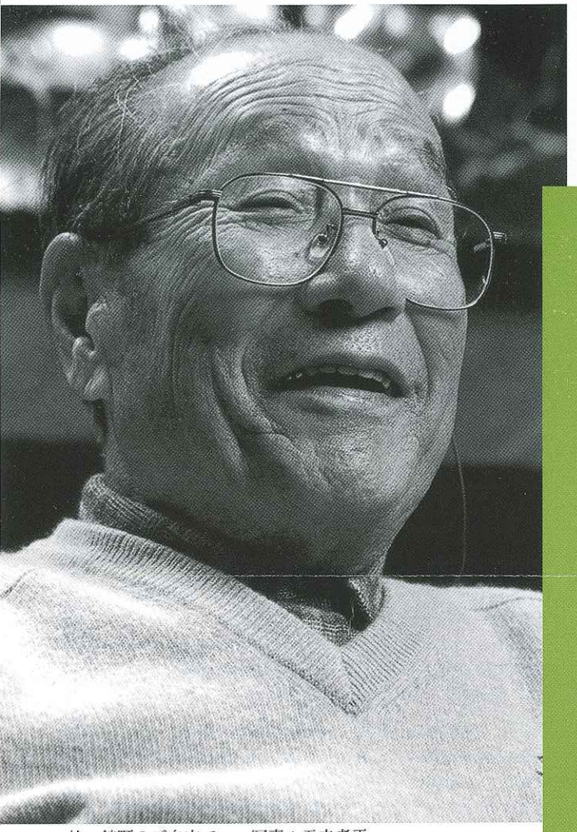
※こもれびの里では現在、新規クラブ員を募集中。応募締切は平成18年3月4日。
問合せは国営昭和記念公園事務所（042-524-1516）まで。

竹内 美津子さん（昭島市在住）

田園風景にあこがれて、仕事を辞めてからのボランティア活動としてこもれびの里に参加しました。が、見るとやるとでは大違い。鍬ひとつ持っても体が思うように動いてくれない。水田班でまだまだ修行中です。来春には水田が広がります。この冬の間に田の畦や粗朶（そだ）柵づくりをします。景観としても農家らしくなっていくのが楽しみです。

諏訪の森は立川文化のふるさと

第60回展を開いた立川美術会代表
関 一男さん



於：錦町のご自宅で　　写真：五来孝平

■関 一男（せき・かずお）／大正11年生まれ。師範学校卒業後、戦争をはさんで小学校教師をつとめた後、立川市、立川市地域文化振興財団で立川の文化行政に深くかかわる。また自ら絵画、水泳、登山などを楽しみ、立川市水泳協会会長も長くつとめた。

■芳賀敏博（はが・としひろ）／えくてびあん編集工房

芳賀　昨年11月に中央公民館で開いた展覧会で、昭和24年の発足第1回展からちょうど60回だそうですね。おめでとうございます。立派な記念画集も出来ました。戦後の混乱期からずっと活動を続けて来られたのはすごいと、改めて感じました。

関　会員や会を支えてこられた先輩たちのおかげです。第1回展は現在の第一小学校（当時柴崎小学校）の講堂で開かれて、教員として展示のお手伝いはしましたけど、当初はプロの絵描きさんたちの会という印象が強くてちょっと敷居が高かった。だから私は設立当初からの会員じゃなくて、出品するようになったのは第5回展くらいかな。

芳賀　関さんが絵を描いたり文化活動にかかわるようになったのは、どういうきっかけだったんですか。

関　教員になった翌年の昭和18年に軍隊にとられ、終戦後もスマトラで捕虜生活を送って昭和22年に帰ってきました。柴崎小学校に戻ったら、日本の教育がどうあるべきかということがまるで見えない。教科書は墨で塗ってるし、修身や国史は教科がなくなって教師も何を教えていいのかわからない。とりあえず駐留軍ににらまれない野球をやらせたり（笑）、よく写生会で絵を描かせました。教師たちが自転車に紙芝居を載せて地域を回り、子ども会づくりにも動いた。絵は家のすぐ近くの幼稚園に古館弘さんという画家が絵を教えにきていて誘われて始めたんだけど、いま思えば時代背景も影響したんだろうね。

芳賀　時代背景というと？

関　いまではなかなか想像できないことですけど、当時の立川は基地と闇市の街、<日本一の夜の街>と呼ばれて、そういう環境から子どもたちをどう守るかが切実な問題だった。「子どもを守る運動」や子ども会活動が展開されました。この街をなんとかしなくちゃいけない、文化を根づかせなくてはいけない。有識者はみんなそう考えていたわけです。立川美術会の結成のきっかけになったのは、昭和21年に当時の一流美術家の作品を集めて駅南口の喫茶店の2階で展示した展覧会ですが、中心になった医師の梅田市作さんたちも、そういう社会的意識があったはずです。

芳賀　そういう時代に出発した美術会の最初の展覧会場が小学校の講堂というのがいいですね。

関　ほかに場所がなかったということもあるけど、柴崎小学校はいろいろなことに使われているんです。第三中学校の校舎になったこともあるし、都立図書館分室も少しの間あそこの教室を使っていた。いまの中央公民館に改築される前の旧公民館が「立川市民憩いの家」という名称でできるまでは、学校が重要な文化拠点の役割を果たしました。

芳賀　60回展の記念パーティーで「立川文化は諏訪の森から」とおっしゃいました。たしかにいまも展覧会場になっている中央公民館を含めてみんな諏訪神社の周囲ですものね。

関　いや「諏訪の森から」と言ったのは、当時9月に行われていた諏訪神社のお祭りに合わせて市内の文化団体が展示をして市民に見てもらったからなんです。美術会と書道連盟、華道連盟の3団体を中心に俳句や和歌の会なども加わり、こうした活動がその後の立川文化連盟の結成、さらには現在の立川文化協会につながっている。いまでこそ中央公民館は便利のいい場所になりましたが、旧公民館ができた頃は正面の道路はなくて、狐でも出そうな寂しいところでしたよ。そこに市民が集まれる場所を作ろうと、武蔵村山にあった旧陸軍少年飛行兵学校の廃材を買ってきて建てた。それも市にはお金がないから市民が募金して。一時は都立図書館も児童相談所も教育委員会も旧公民館の建物を使いました。その意味で、諏訪の森はやっぱり立川文化のふるさとだと言えるでしょうね。

芳賀　関さんはその後、立川市の職員になって社会教育や文化行政にも深くかかわるわけですが、やっぱり絵を描いていたことと無関係ではないんでしょ？

関　まあ、子どもたちを教える面ではあまりいい教師じゃなかったかもしれない（笑）。でも、いつの間にか立川の小中学校の図工部長などという立場になり、先生たちに染織を教えるために染織家の辻もと以さんに習ったりしました。辻さんはもう亡くなられましたが、長く立川美術会の代表をされました。設立当時の事務局長だった市職員の虎谷猛さんとも子どもたちの写生会のことで親しかったし、錦町で福本芸研ホールを主宰していた名取吾朗さん、読売新聞の論説委員をした伊佐秀雄さん、歌人の八木下禎治さん……若造の私が、後に立川文化連盟結成の中心になる人たちと交流できたのは美術にかかわっていたのと、やっぱり立川に文化を作り上げるんだという熱気に満ちた時代だったからなんじゃないかな。

芳賀　立川文化連盟ができた昭和33年からもう半世紀近く経ちますし、社会も立川の街も大きく変わりました。そういう中でプロ、アマを問わず「審査なし賞なし」で展覧会を持続してきたというのが、立川美術会の誇るべきところであり、立川という地域が持っている力じゃないかと思います。

関　多摩地域に根ざした美術団体がたくさんあるけれど、その始まりのほとんどに立川美術会がかかわってきたという自負はあります。しかし社会全般について言えることですが、戦後の一時期のような飢えというか、切迫したものがなくなりました。すべてが充足している。文化面でもスポーツでも、いまではやる気さえあればたいていのことは比較的身近にできる環境があるわけです。立川美術会も初期はプロやプロになろうという人たちが中心で、ここを足がかりにもっと上に行こうという意識が強かった。最近入ってくる会員はほとんどが「エプロン会員」。家庭人であり、生活の楽しみとして絵を描こうという人たちです。裾野が大きく広がって、上を目指そうというエネルギーは弱くなっているかもしれない。「審査なし賞なし」というアンデパンダン方式の良い面を保ちながら、プロやプロを目指そうという意欲を持った人たちの芽も伸ばし、会員がより良い作品を作ろうと刺激しあう活力をどう維持していくかが課題ですね。

芳賀　関さん自身がいまも描き続けているエネルギーもすごい。

関　いやぁ、才能の限界もわかっているし、いまは好きなように描くだけ（笑）。でも最初の頃は「いいところがあるね」と褒められて気持を引き立てられましたね。そして必ず展覧会で発表すること。人間、ある程度自分を追い込まないと努力しないから（笑）。

曙町
トポス 立川店 曙町2-18-18 525-0331
三井石油 フロンティア立川 曙町2-19-9 527-3943
手打ちそば しえもと 曙町2-20-5 529-5468
渓流魚菜料理 一竿 曙町2-22-23-B1F 527-3640
天ぷら わかやま 曙町2-22-23-3F 525-0222
園部肉店 曙町2-28-16 522-2901
ベトナム家庭料理 COM VIETNAM 曙町2-32-3-B1 526-5822
立川市女性総合センター アイム 曙町2-36-2 528-6801
三田花店 立川高島屋店 曙町2-39-3-1F 526-4187
エミリーフローゲ 高島屋立川店 曙町2-39-3-3F 526-9788
立川高島屋 サービスフロア 曙町2-39-3-7F 525-2111
オリオン書房 ノルテ店 曙町2-42-1-3F 522-1231
ジェイティビー 立川支店 曙町2-42-1-8F 521-5550/5585
元祖つけ麺 味幸 曙町3-4-2 527-4701
立食いそば・うどん むさし 曙町3-21-21-1F 521-0377

高松町
和菓子郷 花奴万葉庵 工場売店 高松町1-22-8 0120-398785
多摩画材（景品交換所） 高松町2-1-25 522-6031
丸助青果店 高松町2-4-18 522-3542
米穀・食料品 横町屋 高松町2-11-23 522-2609
ふじ整体院 高松町2-25-2-2F 540-9155

えくてびあんの輪
立川と語ろう 立川に生きよう
えくてびあんは
リストのお店にいつもあります
今月は 曙町・高松町・若葉町・西砂町・一番町・上砂町・栄町のお店です。

高松町
ライブハウス Crazy JAM 高松町2-26-3-B1 529-9507
OBANZAI-YA 茄子菜 高松町3-14-2 521-2918
書籍・雑誌 フレンド書房 高松町3-18-2 527-1555
サロン・ケベクア美容室 高松町3-21-12 527-4716
HAIR MAKES たしろ 高松町3-26-16 525-2175

若葉町
ふとんの 青木寝商 若葉町1-8-1 536-6833
シルバーレストラン サラ 若葉町1-10-1 534-0602
Beauty Salon リラ 若葉町1-11-1 536-3048
浅見内科医院 若葉町1-11-20 537-0918
みふじサイクル 若葉町1-12-4 536-7166
生鮮館 和光 立川店 若葉町1-13-2 538-3121
鮨処 舎利とねた 若葉町3-43-2 537-4120

西砂町
パティスリー プルミエール 西砂町1-36-11 531-4835
有限会社 東京きのこ社 西砂町2-32-2 531-5625
パン工房 ゼルコバ 西砂町5-6-2 531-2392

一番町
CHAINESE DINER 陶桃 一番町4-57-1 531-3100
フレッシュグリーン 八百賢 一番町6-17-9 531-5164

上砂町
fresh shop スーパーはしもと 上砂町3-2-1 536-2331

栄町
多摩信用金庫 栄町支店 栄町2-59-8 536-9711
いなげや 立川栄町店 栄町3-7-1 523-7201

うつわ自在に己流（おのれ）

陶芸家 堀川貴永の流儀

玉川上水 金比羅橋にほど近い住宅地、
うっかり通り過ぎてしまいそうな奥まったところに「器屋」と看板を掲げた家がある。
陶芸家 堀川貴永（たかのり）さんの工房兼ギャラリー「己流庵（きりゅうあん）」。
食器、茶器、花器……うつわを作り、陶芸教室を開き、人と語り合う。
自在な発想で己流（おのれ）。
使う人や場所を思いながら創るうつわは、遊び心や、人と人の繋がりまで容れられるらしい。

写真：小林 達実

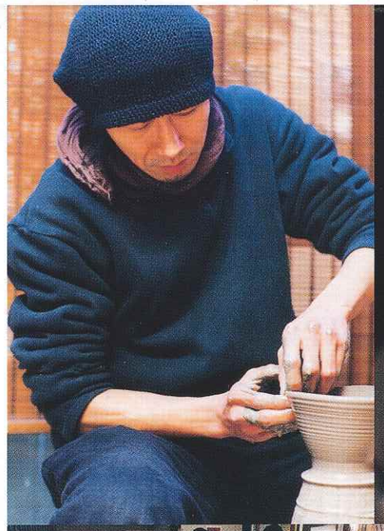
2階ギャラリー 障子からの光が清々しい

初めから陶芸を目指していたわけではない。かつては店舗デザインの会社勤め。チームを率いてする仕事だけでなく、すべてを自分の手で作ることがしたいと思っていたとき出会ったのが陶芸。のめり込んだ。

10年前に立川で窯を持ち、一昨年、西砂町から自宅だった現在の場所に移った。和の雰囲気が心地よい玄関や2階ギャラリー、陶芸教室にもなる1階の工房、改装はすべて自分の手で。あくまで己流。

月曜以外毎日開く陶芸教室でも、基本的な技術をひとわたり教えたあとは、それぞれが作りたいものを自ら考えて作る。技術的なアドバイスや手助けはするが、何をどう作るかは作り手次第。ひとりひとりが創造する場なのだ。

料理店などで使うオリジナルの器一式を企画することもある。料理や器についての考えを語り合い、その店の客室の空間、周囲の自然など、使われるイメージから器を考える。料理に限らず、土のあたたかみのある器を通じて広がる世界と人との出会い。己流庵主人には、それが何より嬉しい。



1階工房 陶芸教室生も練り、ろくろ、色着けなど自分の作業をする

立川と多摩地域が
もっと楽しいホームページ
多摩てばこネット
http://www.tamatebako-net.ne.jp/
多摩てばこネット編集工房
〒190-0012 立川市曙町3-4-3 武藤ビル2F
tel 042-548-9606 fax 042-548-9609
e-mail message@tamatebako-net.ne.jp

常楽我浄
真如苑提供番組<じょうらくがじょう>
スカイパーフェクTV 216ch、マイ・テレビ 84ch
土　曜　午前9時～9時15分
　　午後7時15分～7時30分
再放送／火曜　午前9時～9時15分
　　午後7時45分～8時
放送時間は予告なく変更する場合がございます。
立川に育てられて七十年
真如苑
柴崎町1-2-13 Tel.527-0111(代)

価値創造合併
多摩に新生「たましん」誕生。
http://www.tamashin.jp
多摩信用金庫

えくてびあん流

多摩川べりにモンゴルの住宅<ゲル>

立日橋近くの「東京賢治の学校」にモンゴルの伝統的住宅<ゲル>が完成した。横綱朝青龍を始め相撲界の活躍で注目される牧畜の国。遊牧生活で持ち運びできる天幕の住宅がゲル。モンゴルと交流のある立川の有志から寄贈されたゲルを、昨年11月から本場モンゴルの職人さんをはじめ、同校の子ども、親たちも力を合わせ組み立てた。

1月15日、日本モンゴル交流協会や支援した国際ソロプチミスト立川などの関係者も出席して落成式。前日の豪雨がうそのように晴れ上がり、白く輝くゲルの入口を五色の幟で飾り完成を祝った。同校ではゲルの寄贈をきっかけにモンゴル語の授業も始まり、丸い天幕の建物が立川と草原の国をつなぐ。

人間写真家・細江英公三部作

『えくてびあん』表紙を毎号飾る写真を撮影していただいている写真家、細江英公さんの自伝的三部作が完結した。『なんでもやってみよう・私の写真史』『ざっくばらんに話そう・私の写真観』＝写真＝、そしてこのほど出る『球体写真二元論・私の写真論』(いずれも窓社刊)。

2005年(72歳)から、写真を撮り始めた1950年(17歳)まで年を遡って活動を記した『なんでも……』、対談形式で「私は『感心する写真』ではなくて『感動する写真』を選んだ」「写真家は普通の人間でいい」など、細江語録満載の『ざっくばらんに……』、未発表写真を含めて写真のあるべきあり方を論じる『球体……』。

三島由紀夫、土方巽ら多くの人を撮り続け「人間写真家」を自認する細江さん自身による<細江英公の過去・現在・未来>である。

この人この店 ㉜

Cafe Cuisson

店長　森川美子さん

〒190-0013
立川市富士見町2-12-7
TEL 090-6935-1227
営業時間　11:00～14:00 ランチ
14:00～16:00 ティータイム(ペット可)
18:00～22:00 ディナー
日曜日ときどき休みます。

場所は富士見町2丁目。「ガッツリ食べていただきたいんです」と、ランチの食べ放題ヴュッフェを勧めてくださる森川さん。サラダ、スープ、日替わりの肉料理や煮込み料理が何種類も並び、麦ご飯、おかゆ、パンもおかわり自由。あぁ、もうおなかいっぱいだ……と思った頃、「パスタができましたので」と細麺のツナスパゲッティがテーブルに。デザートと熱いコーヒーを楽しんでランチは終了。「一人でやっているのでお客様にサービスができないんです。勝手にどんどん食べていただければすごく嬉しい」とおっしゃいますが、勝手にどんどん食べられるなんて、こっちの方が嬉しいです。午後のティータイムはペット同伴可。昭和記念公園で遊んだあと、ゆっくり休んでいくのもいいかもしれません。食品業界で腕を磨くこと十数年。速い、美しい、そしておいしい。ついつい食べ過ぎてしまいそう。

ランチヴュッフェ(1000円)のメニューから

写真：五来孝平

◆ タチカワ誰故草(たれゆえぐさ) ㉜ ◆

大トンガ文化大学

森　忠明

大東(だいとう)、というと何だかエラソーな字面と語音だが『大言海』には〈日本の呼稱。支那ニ對シテ云フ卑屈稱ナリ〉とある。なるほど、我が母校・大東文化大学がやけに謙虚で、私学の雄だの陸の王者だのと気負わないわけが分かった。

四十年前、そこに通学していた日本(わたし)文学科生をつかまえ、「東大出の詩人にはクズが多いけど、大東大のモリチュウメイは東大出より詩がうまいから大・東大だね」。真顔でそう言ったのは寺山修司。そしてその大学がトンガ出身偉丈夫ラガーたちによって有名になったので、「大トンガ文化大学」と呼んだのは井上ひさし氏。さすがである。

私の二年後輩の鏡保幸(かがみやすゆき)氏は、大東大ラグビー部を三度も大学日本一へ導いた名監督。この人の言動には傍流毅然というか、とりつかぬ力で浮むかはづかな(丈草)的余裕がただよう。

一九八八年一月二日。第24回大学選手権準決勝。対同志社大戦。前半をリードしてハーフタイムを迎えたとき、NO.8シナリ・ラトウ(現監督)が足の肉離れ。悪化したので交替したいと申し出た。鏡監督は(ラトウよ、もう10分でもいいからプレーしてくれ)と拝みたくなる。でもだ、ラトウが自分のプレーよりも他選手に任せた方がチームのためになると即断したんだ、この試合がどうであれ、ラトウの足とその意思を大切にしようと決める。〈チームの大黒柱を失った大東文化大が、ディフェンスの乱れも出て健闘空しく敗北。連続大学日本一の野望は断たれました。後半、10分間だけでも無理をさせてラトウにプレーさせれば勝てたかもしれません。しかし、そうしたら選手たちは「監督は俺たちの判断を無視して、勝つことだけしか考えていないんだ」と思ったでしょう。〉(鏡保幸『初心者のラグビー』成美堂出版)。

挿画：野崎義成

昨秋十一月六日。秩父宮ラグビー場で行われた関東学院大との試合は、ここ十年間に観たなかでベスト3に入る大熱戦だった。残念ながら1トライ差で負けたけれど。

残り五分。まだ逆転可能と思われたとき、トンガハイスクール出身の左ロック、エモシ・カウヘンガ君(身長200センチ、体重112キロ)が、外見は痛んでいそうもないのにリザーブ選手と交替した。あれはカウヘンガ君じゃなくてロトゥ・フィリピーネ君だったかもしれない。中央席のOB(オレ)はそれを確認できないほどエキサイトしていたのだ。

もうひと頑張りすれば勝てそうな場面でも〈本人の将来のため〉あっさり?引き上げるカガミズムは継承されているようであった。

決勝戦キックオフまであと二十分の時点、悠然と外苑前駅の階段を昇っていたワテソニ・ナモア。神戸製鋼に88点差の惨敗を喫した直後、平然と寮に戻って税法の勉強をはじめたロペティ・オト。トンガ王国の留学生には、ある種の威厳、半神的な美を感じる。

表紙の人

三島 徹さん(柴崎町)

柴崎町にある自転車屋さん「サイクルハウス輪輪館」は、店主の若々しいサスペンダーとエルヴィス・プレスリーばりの見事なもみあげがトレードマーク。斬新なデザインやスポーツタイプの自転車が並ぶ店内にはギターも飾られロカビリーなこだわりが感じられる。パンクやちょっとした不具合も気軽に直してくれ、店先には売りものではないが前輪の大きなクラシック自転車やポケット自転車もすぐに乗れる状態で置いてある。乗り捨ての単なる道具としてではなく、遊び心やペダルを踏んで走る自転車の楽しさへの熱いこだわりまで、いっぱいに伝わってくるのだ。

多摩川堤防下で　写真：細江英公

かたこと

雪国では豪雪になったこの冬。それと比較はできませんが立川も雪が降りましたし、とにかく寒い冬でした。厳しい寒さも緩んで来て、間もなく本格的な春です▼どういうわけか受験シーズンと雪は相性が良いようで、今年も影響を受けたり気をもんだ受験生諸君が多かったようです。その結果も既に出て、希望がかなった方も残念だった方もいるでしょう▼ものみな動く春は人間に喩えれば青春。自らを思い出しても甘く楽しいだけではなく苦い味もするのです。苦い思いや、つらい経験も無駄ではない。生きる上での財産をいただいたのだと、わかるのは大体後になってからです▼卒業や進学、就職や異動。喜びや希望、寂しさや不安も全部一緒に包み込む春弥生▼ものみな動けば人の心も浮き立ちます。VIEWは砂川でやきものを焼く若手陶芸家、堀川貴永さん。土くれに器を使う人の想いを重ねて命を吹き込みます▼対談でご登場いただいた関一男さんは長年立川の文化活動に関わっていらっしゃいました。自らも絵を描き、水泳もと幅広くたしなまれる▼何よりも、常に次はより良いものをと前向きに続ける姿勢は、年齢ではない<青春>なのだと思います。春。えくてびあんも青春をしているだろうかと自問します。(芳)

スタッフ
編集　大久保清志／清水恵美子／中薫子
デザイン　池田隆男(WATER DESIGN ASSOCIATES)
　AMNET design factory
写真　小林達実／五来孝平

えくてびあん(C) 3月号
第24巻　通巻256号
平成18年3月1日発行
発　行　えくてびあん編集工房
〒190-0012
東京都立川市曙町2-17-5 杉田ビル3F
TEL 042-528-0082　FAX 042-528-0065
編集人　芳賀敏博
発行人　加賀悦也
印　刷　(株)大廣社

無断転載を禁じます。

【梅入り上用】

梅の花、一輪咲くごとに春は本番になる。立川の梅が枝に大きな青梅を見られるのは、まだまだ先の話だが、いついただいても初夏のおいしさを味わえるのはこの一品。しっとりとした皮はほんのり香るこし餡を包み、その中に甘く煮た梅の実がさわやか。

（梅乃／栄町）

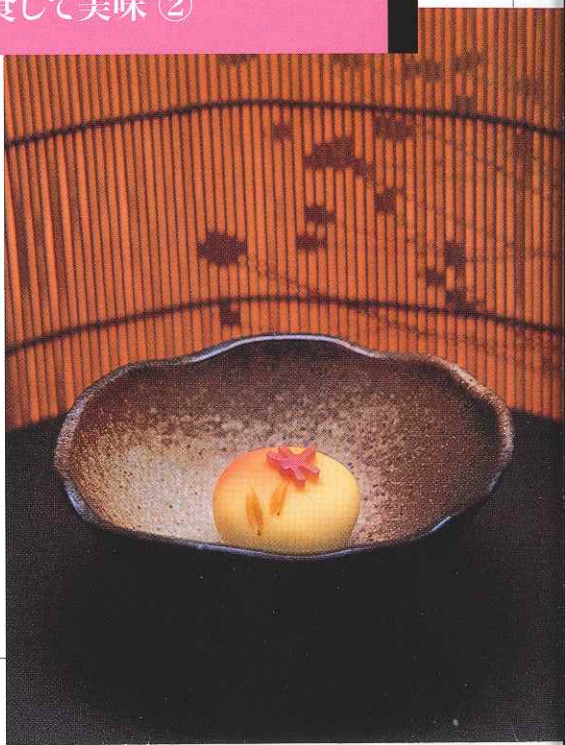
立川和菓子ものがたり

目に美しく食して美味 ②

【煉切り】

季節の情景を簡素に表した一品。厳選された素材がやさしい味わいを出している。煉切りの上に乗っているのは羊羹のとんぼ。夕暮れ時の茜空に、たくさんの記憶がよみがえる。味わう前に眺めていると、遠い日の母の声が聞こえてきそうだ。

（花奴万葉庵／幸町）



写真：五来孝平